

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

『プレザンス・アフリケーヌ』研究（3）テキスト・思想・運動

2018年度第3回研究会（通算第3回目）

- ・日時：2019年3月23日（土）10:30-18:30, 24日（日）10:00-18:00
- ・場所：マルチメディア会議室(304)
- ・使用言語：日本語
- ・共催：共同利用・共同研究課題「『プレザンス・アフリケーヌ』研究（2）テキスト・思想・運動」、科研費（基盤B）「世界文化〈資本〉空間の史的編成をめぐる総合的研究：アフリカ・カリブの文学を中心に」（研究代表者：星埜守之（AA研共同研究員，東京大学）課題番号：17H02328），科研挑戦的研究(萌芽)「人類学的手法を取り入れた黒人文化総合誌『プレザンス・アフリケーヌ』の複合的研究』（研究代表者：佐久間寛（AA研所員）課題番号：17K18480）

3月23日

1. 中村隆之（AA研共同研究員，早稲田大学）「『プレザンス・アフリケーヌ』誌の論説を読む」
2. 中尾世治（AA研共同研究員，総合地球環境学研究所）「西アフリカにおける文字言語間の競合と『プレザンス・アフリケーヌ』：アマドゥ・ハンパテ・バにおける文字・印刷物／手稿書・転写」
3. 久野量一（AA研共同研究員，東京外国語大学）「キューバ文芸誌にみるアフリカー-「アバンセ」から「カリブ年報」まで」
4. 全員 打ち合わせ

3月24日

1. 松本尚之（AA研共同研究員，横浜国立大学）「アフリカン・ルネサンスと伝統的権威者」
2. 小川了（AA研共同研究員，東京外国語大学名誉教授）「Boilat と Senghor における「同化」とナショナリズム」
3. 福島亮（AA研共同研究員，東京大学大学院）「水牛楽団と文化資本—電子アーカイブプロジェクトと分析」
4. 全員 総合討論

概要

2018年度第3回研究会を上記の日時および場所で開催した。

1日目の午前は本研究課題に掲げているテキストの共有を目的とする読書会に充てられた。担当者である中村がシェク・アンタ・ジョップの「アフリカの文化的貢献ならびに展望」をフランス語から訳出し、このテキストを検討するかたちで進められた。午後には2件の研究発表がおこなわれた。以下、報告者による発表要旨を転載する。

中尾世治「西アフリカにおける文字言語間の競合と『プレザンス・アフリケーヌ』： アマドゥ・ハンパテ・バにおける文字・印刷物／手稿書・転写」

本報告では、アマドゥ・ハンパテ・バ（1901-1991）の著作がどのような歴史的コンテクストのなかで書かれたのかを明らかにし、西アフリカの歴史からみた『プレザンス・アフリケーヌ』（以下、PA）誌の位置づけとハンパテ・バにとっての書くことについて論じた。植民地統治以降、アラビア語とフランス語の2つの知的伝統が相互に関連なく併存するようになり、1910年代以降、教師・「現地人行政官」によってフランス語の文書が多く書かれるようになった。特に、フランス黒アフリカ研究所（IFAN）はこうした教師・「現地人行政官」たちの文化-政治運動の揺籃の場となり、PA誌の創刊メンバーや寄稿者たちとなっていった。ハンパテ・バもまた、元「現地人行政官」であり、IFANに所属し、PA誌に寄稿するようになった。

ハンパテ・バはアラビア語の読解能力、フルベ語のアジャミーとフランス語の読み書き能力を有し、アジャミーとフランス語を用いて書かれた手稿書を残している。しかし、ハンパテ・バは、ラテン文字転写のフルベ語とフランス語の対訳を含むフランス語の著作しか出版できなかった。フランス人行政官マルセル・カルデールとハンパテ・バによる共著の『チェルノ・ボカール：バンジャガラ賢者の』（1957年）は、数年前に展開した、現地語によるイスラーム教育を公教育に接合させる対抗-改革運動という宗教-政治運動の思想的な基盤としてPA社から出版されたが、この運動と執筆活動とが結びつくことはなかった。

こうしたラテン文字とアラビア文字を用いる文字言語のあいだの競合と制約のなかで、ハンパテ・バは執筆活動を行っており、アラビア語の文字言語の知的伝統が、ハンパテ・バによるチェルノ・ボカールの言葉のフランス語と、アラビア語訳の比較によって読みとることができることを示した。

久野量一「キューバ文芸誌にみるアフリカー『アバンセ』から『カリブ年報』まで」

本発表では、20世紀のキューバの文芸誌を振り返り、「アフリカ」がどのような変容を遂げてきたのか、またそこにどのように『プレザンス・アフリケーヌ(PA)』誌や黒人作家・芸術家会議が関わっているのかを確かめた。対象としたコーパスは『アバンセ』、『オリヘネス』、『カサ』、『ユニオン』、『批判的思考』、『三大陸』、『カリブ年報』などである。世紀前半にアフロキューバとしてあらわれたアフリカは、革命を経て国際的な文化運動と結びついてゆく。米国の公民権運動の国際化をはかるなど、キューバは自らを発信源としながらアフリカ文化探求を深めていく。その後第三世界との連帯を通じてアフリカとの接近をはかると、「ラテンアフリカ」概念の発見にいたる。そこには付かず離れずの関係を維持していたPA誌の働きも見落とせない。キューバにとってのこうしたアフリカへの接近と結合は、カリブ諸島との新しい出会いを準備することになっている。

以上2件の報告に先立ち、国際シンポジウムをふくむ2019年度の研究会のスケジュールおよび研究成果の公開に向けた打ち合わせがおこなわれた。

2日目は午前1件、午後2件の研究報告がおこなわれた。以下、報告者による発表要旨を転載する。

松本尚之「アフリカン・ルネサンスと伝統的権威者」

本発表では、アフリカン・ルネサンス論における伝統的権威者（王／首長）の位置づけの変遷について論じた。特に、アフリカ人知識人やナショナリストたちが、自身の伝統や文化、慣習をどのように理解し、また政治と関連づけていたかを考察することが目的であった。

アフリカン・ルネサンス論は、アフリカの再生を唱う思想と、その運動である。アフリカの「第二の解放」が論じられた1990年代後半に広まった思想であり、南アフリカ大統領タボ・ムベキ大統領が唱道したことで有名である。その思想的源流としては、20世紀前半に活躍した知識人、シェク・アンタ・ジョップやナムディ・アジキウエが挙げられる。

20世紀前半のアフリカン・ルネサンスにおいて、ジョップはアフリカの復権を掲げ、エジプト王朝のアフリカ起源説を主張した。しかし、王制はあくまで過去のものであり、国家独立においては、「封建制」や「黒人による黒人の支配」として否定された。すなわち、アフリカの過去と現代アフリカの政治は明確に分離して議論されていた。

それに対し、20世紀末のムベキによるアフリカン・ルネサンス構想においては、伝統的権威者たちは、ルネサンスを担う主要なアクターとして語られている。伝統的権威者たちは、民主国家が目指すべき政治理念（脱集権化や多元性の尊重）を具現化する存在として、位置づけられているのである。

本発表では、アフリカン・ルネサンス論における伝統的権威者たちの位置づけの変化について、その背景にあるアフリカの政治社会的変動をナイジェリアを事例に報告した。今後は、アフリカ人知識人やナショナリストたちの思想について研究を深めるとともに、発表に対して参加者から得たアドバイスや指摘をふまえつつ、アフリカン・ルネサンスと伝統的権威者の関係、ひいてはアフリカにおける政治と文化の関係について研究を進めていきたい。

小川了「Boilat と Senghor における「同化」とナショナリズム」

1853年に公刊されたダヴィッド・ボワラの著書『セネガル素描』はセネガルの諸民族の風習、宗教などに関してセネガル人自身の手になる初の著書として認識されてきた。著者ボワラはセネガルで生まれたのちフランスで教育を受けた人であり、その著書も当時のフランスでの植民地統治原理としての同化主義思想を体現するものであるかのように見えるが、子細に検討するとナショナリズム的要素を多く含むものであることが分かる。

ボワラの著書公刊から84年後の1937年、アフリカ人初のアグレジェとしてセネガルに凱旋したL. S. サンゴールは「AOFにおける文化の問題」と題する講演をおこない、フランスによる植民地統治下にあるアフリカの現状を受け入れざるを得ない状況を述べた上で、アフリカ現地の文化の認識が重要であることを強調し、その考えはやがて「同化される」のではなく、自分たちの側からフランス文化・文明を取り込むという意味で能動的な同化の重要性を述べることにつながっていく。19世紀から20世紀半ばにかけてのフランスの植民地統治の思想に抗する考えはセネガルにおいて早い時期からゆっくりとはあるが、着実に形を成すようになっていったのである。

福島亮「水牛楽団研究・序論—文脈、展望、電子アーカイブプロジェクト」

本発表では 1978 年に高橋悠治を中心に東京で結成された水牛楽団について、その歴史的背景と資料の現状、研究の展望（電子化）について述べた。水牛楽団は 70 年代後半から 80 年代にかけて日本国内の問題と第三世界の問題に立ち向かい、さらにタイ、フィリピン、チリ、韓国といった国ぐにの文化運動に実際にかかわったグループである。水牛楽団はタブロイド判新聞「水牛 アジア文化隔月報」（78 年から 79 年）と雑誌「水牛通信」（80 年から 87 年）を刊行した。これらは同時代の日本におけるミニコミ刊行ブームを背景とするものであったが、それは同時に出版社や大型書店に依存しないマイクロ・メディアの可能性を模索するものでもあった。第三世界と文化資本について考えるとき、このマイクロ・メディアの存在は無視できない。というのも、マイクロ・メディアの場合、文化資本は蓄積されるだけでなく、散逸されたり忘却されたりすることもあり、さらにはメディアの技術的発達とともに資本としての価値を失うこともあるからである（ジェネレーションギャップもそうした現象の一つであろう）。逆に、水牛楽団のメンバーはのちに青空文庫立ち上げにかかわり、文化資本の共有財としての側面を追求する。文化資本とメディアの問題についてはさらなる調査と考察が必要だろう。また、発表後に中尾世治氏から頂いた質疑と助言により、第三世界の問題を日本の地方都市が経験している地域「格差」の問題、さらには国内植民地の問題にまで射程を広げて考察する必要があることもわかった。この点は今回の発表において完全に欠落していた視点である。中尾氏に感謝するとともに、今後の研究の課題としたい。

今回の研究会には初日に 18 名、二日目に 16 名が参加した。各発表にたいする質疑および討論も活発になされ、二日目の総合討論では、プレゼンス・アフリケーヌ研究と並行する科研費の「世界文化〈資本〉」研究班に共通する主題が「第三世界」に見出せることが確認された。

（文責：中村）